

変貌する食の大陸ラテンアメリカ

世界の食料需給の変容の中でラテンアメリカが果たす役割を、ブラジル、アルゼンチンのトウモロコシ、大豆を中心に概観し、大豆は米中貿易戦争でどこが漁夫の利を得るかなど、世界の食をめぐる状況の大きな変化を見つ、世界を席卷する水産品となったチリのサーモンがチャレンジを続け、ラテンアメリカの食肉輸出供給力の背景にある食肉文化など、商品の新たな動きに焦点を当てて「食の大陸」を展望する。

ラテンアメリカにおける食料需給動向と中長期的な見通し —ブラジル、アルゼンチンを中心に—

古橋 元

国際市場におけるラテンアメリカを含む 新興国・途上国の台頭

2000年代以降の穀物・油糧種子や畜産物の国際市場におけるラテンアメリカ（中南米）は、すべてが順調ということではないが、主要輸出国・地域として存在感を増している。ブラジルは、現在、大豆の輸出量では米国を超えており、米国に次ぐ農業大国となり、ブラジル・アルゼンチンを合わせると米国を凌ぐ農業地域（畜産物を含む）として台頭している。アルゼンチンは伝統的な小麦輸出国であるが、多くの課題を抱えながらも、小麦を含めて主要穀物・畜産物の輸出国として存在感を維持・拡大している。2007～08年において様々な要因によって、資源・穀物等の価格の高騰が起こり、穀物等の主要輸出国の輸出の潜在的なキャパシティや新たな輸出国の台頭という国際的なマーケットにおいて変化が生じ、現在に至っている（古橋・小泉・草野 2019）。

世界の食料需給において、2007～08年の穀物・資源等価格の高騰とそれ以降における穀物等の国際市場の変化について確認したい。当時の農産物等の価格高騰は、複数の要因が重ね合わさって起こったと考えられ（Peters et al. 2009）、その要因として主に、中国を含む多くの新興国・経済移行国等における穀物・畜産需要の増加、豪州の2年連続干ばつとロシアを含む欧州での干ばつによる穀物生産量の急減、エネルギー価格の急騰を背景に農業資材等を含む農産物生産コストの増加、トウモロコシや植物油

等のバイオ燃料政策実施による需要の増加、継続的な米ドル安傾向、さらに穀物等の輸出国および輸入国における貿易制限を含む自国の供給を優先する政策変更、継続的な穀物等在庫の低下傾向、金融・コモディティ市場への投機資金の流入等が挙げられる（Tadesse et al. 2011）。

その結果、伝統的に欧米中心だった穀物等の輸出市場における主要輸出国の相対的な地位は低下し、新興国・途上国が主要輸出国として台頭し、輸入市場においても相対的に高い経済成長を背景に新興国等が主要国に参入してきている。また、トウモロコシ・大豆の輸出市場で米国が圧倒的なシェアを占めていたが、ブラジル及びアルゼンチンのラテンアメリカ諸国が台頭して、アジア等新興国の需要増による追加的な輸入量をまかなう構造が定着しつつある。さらに、穀物等だけではなくグローバルに農産物・畜産物の輸出市場で、ブラジル・アルゼンチン等のラテンアメリカ諸国が重要な地位を占める構造となってきた。

トウモロコシ・大豆・鶏肉市場における 輸出入国の変化

2007～08年の価格高騰の要因の一つである新興国・途上国における農産物需要の増加を背景として、これらの新興国等の上位主要輸入国と、ブラジル・アルゼンチンを含む上位主要輸出国の2000年代から2010年代にかけての変化について、OECD

Agriculture statistics (database) を用いて、トウモロコシ、大豆、鶏肉の国際市場から捉えてみたい。トウモロコシの国際市場について(表1)、世界の貿易量(輸出量)が2000年に7,371万トンから2017年には1億4,206万トンで2倍程度まで拡大した。トウモロコシの主要輸出国は、2000年に米国が67%で圧倒的シェアを占めて、アルゼンチンが14%、中国が10%、南アフリカとブラジルが2%となっていた。2017年に、米国が37%で世界最大の輸出国を維持したもののシェアは半分程度まで下がり、ブラジルが21%、アルゼンチンとウクライナがそれぞれ13%、ロシアが4%となり、アルゼンチンを除き、新興の3カ国が輸出国として台頭している。一方で、トウモロコシ主要輸入国は、2017年に、EUが11%、メキシコと日本がそれぞれ10%、韓国とエジプトがそれぞれ7%、ベトナムが6%となり、相対的に日本と韓国のシェアが下がり、アジアの新興国が輸入を増やすことになった。

大豆の国際市場は(表2)、2000年に5,046万トンの貿易量(輸出量)から2017年には1億4,769万トンで規模が3倍程度まで急拡大している。その中で大豆の主要輸出国は、2000年に米国が54%でトウモロコシと同様に圧倒的な市場シェアを占め、ブラジルが31%、アルゼンチンが8%、パラグアイが5%であった。2017年には、ブラジルが42%で世界一の

表1：国際トウモロコシ市場の上位輸出入国

	輸出量		輸入量	
	2000	2017	2000	2017
1位	米国	米国	1位	日本
2位	アルゼンチン	ブラジル	2位	韓国
3位	中国	アルゼンチン	3位	メキシコ
4位	ブラジル	ウクライナ	4位	エジプト
5位	南アフリカ	ロシア	5位	EU
			6位	カナダ
			7位	マレーシア
世界の貿易量(1,000トン)	73,713	142,055	77,187	141,710

出所：OECD Agriculture statistics

表2：国際大豆市場の上位輸出入国

	輸出量		輸入量	
	2000	2017	2000	2017
1位	米国	ブラジル	1位	EU
2位	ブラジル	米国	2位	中国
3位	アルゼンチン	アルゼンチン	3位	日本
4位	パラグアイ	パラグアイ	4位	メキシコ
5位	カナダ	カナダ	5位	韓国
			6位	タイ
				インドネシア
世界の貿易量(1,000トン)	50,458	147,687	51,300	150,892

出所：OECD Agriculture statistics

シェアを占め、次いで米国が39%、アルゼンチンが7%、パラグアイとカナダがそれぞれ4%となっている。輸出量は米国も拡大しており、2017年には2000年に比べて2倍以上の5,768万トンに達しているが、それ以上にブラジルの伸びが大きくブラジルが6,181万トンまで輸出量を増やし、大豆市場でシェアを拡大している。一方で、大豆の主要輸入国は、2017年に中国が63%で圧倒的な輸入市場のシェアを占め、次いでEUが9%、メキシコが3%、日本とタイとインドネシアがそれぞれ2%となり、ブラジル・米国の輸出量の多くを中国が輸入するという貿易の構図ができあがり、中国だけでなく新たにアジアの新興国が輸入国として台頭している。

鶏肉の国際市場について(表3)、世界の貿易量(輸出量)は2000年の691万トンから2017年には1,271万トンで市場規模が2倍近くまで拡大している。その中で、鶏肉の主要輸出国は、2000年に米国が37%でトップの市場シェアを占め、EUが15%、ブラジルが次いで14%、中国が9%であった。2017年には、ブラジルが33%で世界一のシェアを占めることになり、次いで米国が26%、EUが3位となり12%、次いでタイが8%となり、トルコが3%であった。輸出量は米国も増加させて2017年には2000年に比べて1.3倍の333万トンに達するが、それ以上にブラジルの伸びが大きく2000年の98万トンから2017年の422万トンまで輸出量を拡大している。一方で、鶏肉の主要輸入国は、2017年には、日本のシェアは低いものの7.2%でトップとなるが、サウジアラビアとメキシコ、EUがほぼ同じシェアの7%で続いている。次いでベトナム、南アフリカ、中国が4%となっている。日本も2000年の69万トンから2017年の91万トンに増加しているが、鶏肉の国際市場において、サウジアラビア、メキシコ、ベトナム、南アフリカ等の新興の輸入国が台頭している。

表3：国際鶏肉市場の上位輸出入国

	輸出量		輸入量	
	2000	2017	2000	2017
1位	米国	ブラジル	1位	中国
2位	EU	米国	2位	ロシア
3位	ブラジル	EU	3位	日本
4位	中国	タイ	4位	EU
5位	タイ	トルコ	5位	サウジアラビア
6位	カナダ	中国	6位	メキシコ
			7位	カナダ
世界の貿易量(1,000トン)	6,908	12,711	6,468	12,602

出所：OECD Agriculture statistics

ラテンアメリカの食料需給見通し

今後の世界の食料需給見通し及び国際市場を考える上で、伝統的な主要輸出国の輸出量の伸びが鈍化する中で、ラテンアメリカ地域の占める重要性はさらに増すと考えられる。そのため、農林水産政策研究所が10年後の世界の食料需給の動向を予測・分析して公表している「2028年における世界の食料需給見通し（以下、食料需給見通し）」（農林水産政策研究所2019, 古橋・小泉・池川2019）の予測結果に基づいて、誌面の都合上要因等の説明は限られるが、トウモロコシ、大豆、鶏肉におけるラテンアメリカ地域の見通しについて考えてみたい。「食料需給見通し」による世界における国際価格（実質）の見通しについて、穀物・大豆等の国際価格は、穀物価格高騰前の2006年以前の低い水準には戻らないものの、今後、弱含みでほぼ横ばいの推移となる見通しとなっている。

トウモロコシについて（表4）、2015～17年平均の値では、純輸出地域として北米が国際市場の66%を占めて圧倒的なシェアとなり、次いで中南米の19%、欧州が14%となっている。一方で、アジアは純輸入地域として国際市場の56%のシェアであり、アフリカの23%、中東の21%と続いている。今後ブラジル、アルゼンチンは、一部大豆の裏作になるトウモロコシの第2作によって生産量が拡大し、純輸出量が拡大する見込みであり、2028年の純輸出量がそれぞれ3,561万トン、2,929万トンに達する見通しとなる。2028年には純輸出地域として北米が国際市場のシェア55%を占めるものの、その相対的地位を低下させて、次いでラテンアメリカが29%と大きくシェアを拡大することになる。一方で、アジアは純輸入地域として国際市場のシェアをやや低下させて52%となり、アフリカはシェアを29%まで上昇させることになる。

大豆について（表5）、2015～17年平均の値では、

表4：トウモロコシの純輸出入量及び予測（単位：百万トン）

	純輸出（入）量			
	2015-17年	同シェア	2028年	同シェア
世界合計	0.0		0.0	
北米	54.7	66%	60.2	53%
中南米	15.8	19%	32.8	29%
オセアニア	0.0	0%	0.0	0%
アジア	-46.3	56%	-60.0	52%
中東	-17.4	21%	-21.0	18%
欧州	11.9	14%	21.2	19%
アフリカ	-18.7	23%	-33.3	29%
(参考)				
ブラジル	22.2	27%	35.6	31%
アルゼンチン	23.9	29%	29.3	26%

出所：農林水産政策研究所（2019）
注：網掛けは純輸出地域または国、純輸入地域または国は網掛けでない

既に純輸出地域である中南米が北米のシェア46%を超えて54%となっている。純輸入地域はアジアのシェアが83%と圧倒的であり、続いて欧州が10%となり、中東、アフリカのシェアは限られている。今後、ブラジルは2028年における純輸出量が7,804万トンに達すると見込まれ、またブラジルは農地面積を増加させる余地が十分にあり、単収だけでなく収穫面積も増やし、アルゼンチンは大豆の国内市場規模が限られるという背景の下、収穫面積も増加させて、両国の生産量は2028年に1億9,716万トンに達する見通しである。2028年には純輸出地域として、北米は国際市場のシェアやや低下させて44%になる一方で、中南米が56%とシェアをやや上昇させることになり、北米が大豆においてもその相対的地位を低下させることになる。一方で、アジアは純輸入地域として国際市場のシェアをやや上昇させて84%となり、さらに中南米・北米からアジアへの貿易の流れが固定化することになる。

鶏肉について（表6）、2015～17年平均の値では、純輸出地域である北米が51%のシェアとなり、次いで中南米が42%と続き、欧州の7%を大きく超えている。一方で、純輸入地域の中東が41%、アジアが33%、アフリカが26%となっている。鶏肉は肉類の

表5：大豆の純輸出入量及び予測（単位：百万トン）

	純輸出（入）量			
	2015～17年	同シェア	2028年	同シェア
世界合計	0.0		0.0	
北米	59.9	46%	68.5	44%
中南米	70.8	54%	85.7	56%
オセアニア	0.0	0%	0.0	0%
アジア	-109.0	83%	-129.4	84%
中東	-5.4	4%	-5.6	4%
欧州	-13.5	10%	-16.3	11%
アフリカ	-2.8	2%	-2.9	2%
(参考)				
ブラジル	63.8	49%	78.0	51%
アルゼンチン	4.6	4%	5.5	4%

出所：農林水産政策研究所（2019）
注：網掛けは純輸出地域または国、純輸入地域または国は網掛けでない

表6：鶏肉の純輸出入量及び予測（単位：百万トン）

	純輸出（入）量			
	2015-17年	同シェア	2028年	同シェア
世界合計	0.0		0.0	
北米	2.9	51%	3.5	34%
中南米	2.3	42%	5.0	48%
オセアニア	0.0	0%	-0.1	1%
アジア	-1.9	33%	-6.0	58%
中東	-2.3	41%	-2.7	26%
欧州	0.4	7%	1.9	18%
アフリカ	-1.4	26%	-1.6	16%
(参考)				
ブラジル	3.9	69%	6.1	59%

出所：農林水産政策研究所（2019）
注：網掛けは純輸出地域または国、純輸入地域または国は網掛けでない

中でも、比較的安価であり、健康志向に即しており、宗教的にも忌避されにくいいため、全世界で消費量が増加する傾向が続く見通しである。2028年におけるラテンアメリカは、ブラジル、アルゼンチン以外の多くが純輸入国となるものの、両国の純輸出量の増加によって、2028年に純輸出量が501万トンまで増加する見通しである。2028年には純輸出地域として中南米が国際市場のシェアを48%まで上昇させて、北米のシェア34%を逆転することが見込まれ、中南米が鶏肉においても北米の相対的地位を低下させることになる。一方で、アジアは純輸入地域として国際市場のシェアをさらに上昇させて58%となり、さらに大豆だけでなく、鶏肉においても中南米からアジアへの貿易の流れが加速することになる。

小括

世界の食料需給において、今後、世界の人口の伸びは鈍化しつつも継続的な総人口の増加と新興国・途上国の「食の高度化」が進むことが見込まれる中で、世界の穀物や油糧種子、畜産物の需要は増加し続ける。一方で、市場の不安定性を内包しつつ、ときに供給過剰となりながら世界の農産物供給は増加

していく。その中で、穀物等の貿易量も拡大していく見通しだが、ブラジル、アルゼンチンを含む限られた主要国に輸出が集中する傾向を強めている。特に、ラテンアメリカと北米への偏在化は、今後も継続すると考えられ、先進国と途上国という枠組みだけでは、捉えきれない世界の食料需給を巡って貿易構造が変化する中で、穀物や油糧種子、畜産物の国際市場におけるラテンアメリカの重要性は今後も増していくことは確実である。

Peters, M., Langley, S. and Westcott, P. (2009), Agricultural Commodity Price Spikes in the 1970s and 1990s: Valuable Lessons for Today, USDA ERS.

Trostle et, R. al. (2011), Why Have Food Commodity Prices Risen Again, USDA ERS.

農林水産政策研究所 (2019), 「2028年における世界の食料需給見通し」, 農林水産政策研究所.

古橋 元・小泉達治・池川真里亜 (2019), 「2028年における世界の食料需給見通し」, Primaff Review, No.90, pp.4-5, 農林水産政策研究所.

古橋元, 小泉達治, 草野栄一 (2019), "世界のフードセキュリティの展開とシフトする穀物等の国際市場構造", 開発学研究, Vol.30, Iss.2, pp.7-19.

(ふるはしげん 農林水産政策研究所 首席主任研究官)

ラテンアメリカ参考図書案内



『大豆と人間の歴史』

—満州帝国・マーガリン・熱帯雨林破壊から遺伝子組み換えまで—

クリスティン・デュボア 和田佐規子訳 築地書館 2019年10月
3,400円+税 ISBN978-4-8067-1589-4

生産量、取引量とも世界最大の油糧種子である大豆は、世界で大量に生産され、食材、食用油のみならず家畜飼料としても大規模食肉生産に大きな役割を果たしている。

アジアにルーツをもち豆腐や発酵などの工夫も加えて食用として利用されてきた大豆が、大航海時代に欧州に伝わり、その後新大陸での栽培も始まり、日露戦争で軍用食として有用性が認められ、第一次世界大戦後にはマーガリンなど新たな利用法の開発もあって、戦時下の食料不足を補い、その生産地を押さえるための戦争を引き起こす要因の一つまでになった。大豆は家畜を肥やす飼料としても需要が拡大し、中国等アジアや北米、さらにアマゾン森林地帯を含むブラジル、アルゼンチン、パラグアイ等の南米で大規模に生産されるようになってきたのにもない、その生産地拡大は熱帯雨林の伐採拡大のみならず土地所有や自然環境破壊、また生産量増大のための遺伝子組み換えによる健康への懸念など新たな問題を引き起こしている。一方、新たな利用法の安価なたんぱく質としての代用食肉や再生可能エネルギー源としてのバイオマス燃料化も注目を浴びている。世界的に取り扱い量で大きな力をもつカーギル社等の大手商社や遺伝子組み換えで支配力を強める種子供給企業など、巨大ビジネスとなった大豆関連産業の登場などにも言及し、「大豆、南米を席卷する」という章も設けられていて、現代に至るまでの世界史の中での大豆の重要性を理解するために極めて有用な解説書である。 (桜井 敏浩)